

インドの受験産業に関する人類学的研究

神崎 成実

2022 年入学

派遣先国：インド

渡航期間：2023 年 2 月 1 日から 2023 年 3 月 17 日

キーワード：インド、ハイデラバード、コーチングセンター

対象とする問題の概要

コーチングセンターとは、日本の予備校のような大学受験を目的とした機関である。世界でも有数な受験大国であるインドにおいて、近年コーチングセンターへの需要が急速に高まっている。工科系大学試験に特化したコーチングセンターの生徒たちは、11 年生(高 2) からコーチングに入学しホステル（寄宿舎）に住みながら、インドにおいて最も入学が難しいとされるインド工科大学入学に向けて 2 年間で試験勉強のみに費やすといわれている。コーチングセンターの産業化は、生徒に過度なストレスを与え、自殺率の増加を導いているとも指摘されている。他にもコーチングセンターは雇用や格差の問題などインド社会の様々な問題を抱えている。本研究では特に工科系大学試験に特化したコーチングセンターの実態を明らかにすることで、現代インド社会をコーチングセンターという側面から捉えなおすことを目指す。

研究目的

ラージャスターン州にあるコタ市は街全体がコーチングの街と化しており「エンジニアと医者のためのメッカ」と呼ばれるほどインドにおいてコーチングで有名な街である。また、テランガーナ州ハイデラバード市は毎年 10 万人以上もの生徒がコーチングセンターに通うために集結し、コタと並ぶコーチングニ大都市と言われている。コタは自殺率の増加により、ニュースや先行研究にて取り上げられているが、ハイデラバードに関しては限られた情報しかわかっていない。しかし、ここ数年の工科系大学試験の成績上位者はハイデラバードのコーチングセンター出身の生徒が占めるなどニュースにて注目され始めている。本調査では、ハイデラバードで有名な工科系大学試験に特化したコーチングセンターである Sri Chaitanya、Narayana、FIITJEE、Aakash の四つの機関にて、聞き取り調査や資料収集採集を行った。生徒や経営側の語りから、各機関の特徴や実態などを明らかにし、考察を行っていく。

フィールドワークから得られた知見について

今回の調査で特記すべき点は二つある。

一つ目は、多様性である。今回調査したコーチングセンターすべてがセカンダリー・スクール（日本の高等学校にあたる）と提携を結んでおり、同じ機関でもコースにより多

様な形態が存在していた。たとえば、Sri Chaitanya や Narayana は事実上学校と化しており、セカンダリー・スクールに通わずにそれらの機関にて卒業認定を取得できる仕組みとなっていた。FIITJEE も上記のようなコースもあれば、セカンダリー・スクールに FIITJEE の先生が工科系大学試験の教科である物理、数学、化学を教えにやってくるというコースもあった。また、どのタイプのコースやコーチングセンターを選ぶかは生徒の出身州や親の意思に基づいているように思われた。

二つ目は、ハイデラバード市とコーチングセンターの関係である。コーチングセンターに通う生徒や先生、以前通っていた生徒たち約 30 人に「なぜハイデラバードがコーチングセンターで有名であるか」を尋ねると、①ハイデラバードには IT 企業が集結し始めておりインド各地から優秀な家族が集まっているため、②アーンドラ地域（テランガーナ州とアーンドラ・プラデーシュ州の二つ州を指す）はインドの中でも学習に励む文化が昔からあるため、③1980 年代に Chakka Ramaiah が始めたコーチングセンターがインド工科大学の合格者を続出させたことをきっかけにコーチングセンターが増えたため、④北インドはコタ、南インドはハイデラバードがコーチングセンターの役割を担っているため、⑤ハイデラバードはメトロポリタンシティであるため、という五つの回答を得られた。①と②に関してはハイデラバードという地域の特有性があり、③はコタも同様に V. K. Bansal という先駆者がおり、ハイデラバードとコタの共通性が見受けられる。①と⑤は、回答者の語りから、ハイデラバードの特有性というより、偶発的にその地域がコーチングセンターの役割を担っただけであり、コーチングセンターという文化がインドにおいて当たり前となっていることを感じた。

反省と今後の展開

今回の調査では、コーチングセンターとは何なのか、何が起きているのかという全体像を把握することしかできなかった。今回の調査で収集した資料を基に、今後は問題点を整理し具体的な研究を進めていく。



FIITJEE の 12 年生の生徒たち



ホステルに住む生徒の唯一の親との連絡手段である固定電話（奥の緑）